様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６３０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０３２９４

研究課題名（和文）アイヌの日常的エスニシティの再編と多文化共生社会に向けた民族誌的研究

研究課題名（英文）An Ethnographic Study toward Reorganization of Ethnicity of the Ainu in their Daily Life and Society for Multicultural Coexistence

研究代表者
関口　由彦（SEKIGUCHI, Yoshihiko）

成城大学・民俗学研究所・研究員

研究者番号：３０５３８４８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：北海道の一地域にみられるアイヌ文化伝承活動において、同質的な共同体認識とは異なる重層化された共同性原理が存在することを検討してきた。その結果、〈アイヌ〉という共同性の認識のされ方は、「血」を共有することによる類似性に基づく関係性と、同じ「場」にいることによる隣接性にもとづく関係性との交錯によって構成されていた。エスニック・アイデンティティは、同じ「場」に居るという隣接的な関係性と深く結びついているのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
（戦略的）本質主義とは異なる共同性原理を明らかになったため、多文化共生の実現という一般的課題において重大な支障となる本質主義と構築主義のアポリアを乗り越えると共に、他の諸集団にも適用可能な「共生」概念を実証的に検討することができた。また、複数の集団の境界を越えるつながりに開かれた関係的主体のネットワーク（調査・研究者を巻き込む）についての理論としてエスニシティ論を再構築できた。

研究成果の概要（英文）：I examined the presence of a stratified communal principle in Ainu cultural activities of a region of Hokkaido. This is distinct from the study of a homogeneous community. As a result, the way to perceive the community of Ainu is constituted of the combination of the relationship of resemblance that is made by sharing “blood” and the relationship of contiguity that is made by existing in the same “place”. Ethnic identity has closely combined with relationships of contiguity based on a feeling that they are all in the same “place”.

研究分野：文化人類学

キーワード：エスニシティ　アイデンティティ　ライフストーリー　ライフヒストリー　多文化共生　先住民族　アイヌ民族

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（1）文化人類学の観点から、多文化共生という理念に通底する課題として、各集団の文化に関する本質主義の問題が挙げられる［竹沢 2009］。他者を固定的に表象する本質主義に対して、構築主義は固定的集団の観念を虚構として退けるが、そのことはマイノリティ自身が主張する集団の解体にまで進んでしまった。その結果、構築主義的論理を徹底することは、マイノリティが自らのアイデンティティを確立したり、構造的差別に抗うために拠り所としていた共同性すらも失わせてしまう。他方で、マイノリティによる共同性の確立を重視する人びとは、本質主義の問題を自覚したうえで抵抗のために戦略的に本質主義を用いるという立場をとる［戴 2003］。この戦略的本質主義と呼ばれる概念は、欧米社会における多文化主義が基礎とするものでもあったが、多文化主義自体が、固定的表象の問題を克服することができないまま「終焉」が叫ばれる状況を迎えている。そもそも本質主義／構築主義のジレンマ［岩渕 2010］に陥るのは、これまでのエスニシティの理解が本質主義ないし構築主義のいずれかに偏った「非日常的エスニシティ」に基づくものであり、人びとの生活実践を反映したものではなかったことによる。

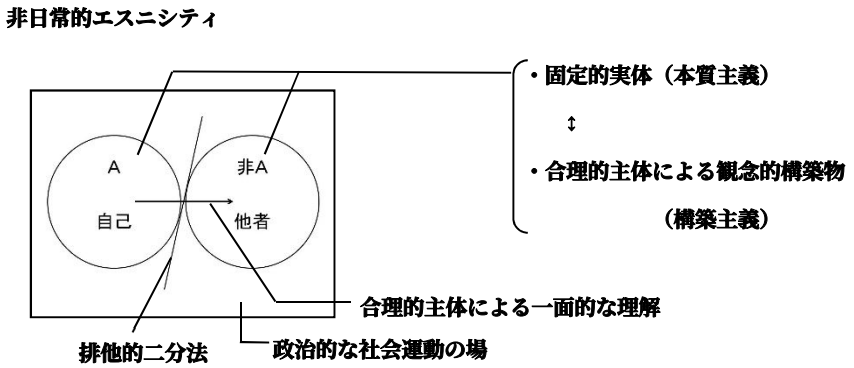
（2）本研究は、日々の生活の中で人びとが不断に再編する「日常的エスニシティ」に焦点を当てて、エスニシティ論を再考するものである。本研究が提唱する「日常的エスニシティ」概念は、エスニシティの結びつきを合理的主体による自由な操作に基づくものとして捉える立場を退け、人びとの日常生活の中での〈想い〉によって生まれるつながりに着目する立場をとる。日常的な関係性に深く根差した視点から、エスニシティの境界を排他的なものとして捉えない意識のあり方を日常的エスニシティという鍵概念にもとづいて検証する。非日常的エスニシティが合理的主体による境界の固定化を前提としているのに対して、日常的エスニシティにおいては、他者とのつながりを保持する関係的主体がいかにして自他の境界を流動化させ、多元的なつながりを形成していくかという動態を検討する。

（3）グローバル化に伴う 1990 年代後半以降の在日外国人たちの定住化と多国籍化という状況をうけて、日本社会では、複数のエスニシティ間のより調和的な共生が求められている。その要請に応えるべく日常的エスニシティという観点を用いることで、他者との間に排他的で固定的な境界を設定することなく、関係的主体が自らの生活の便宜に応じて自他の境界を再編しつづけるような共同性の可能性を探っていく。

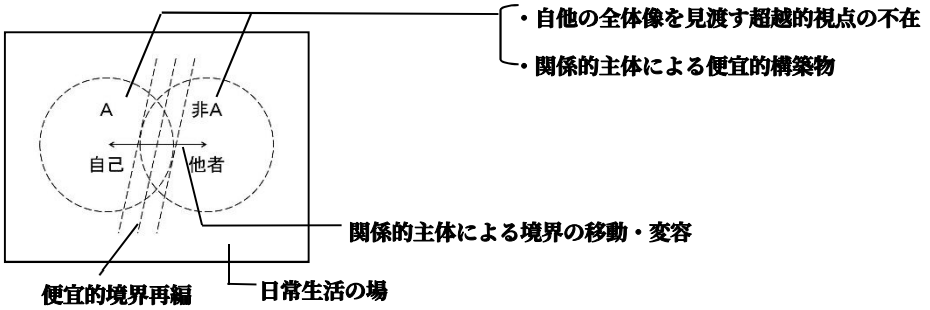
２．研究の目的

本研究は、アイヌ民族の複数の具体的事例から日常的エスニシティの再編過程の実態を明らかにする。地域社会においてアイヌ文化を継承しようとする人びとは、固定的なアイヌとしてのアイデンティティに基づいて行動するというよりは、日常的な人間関係の中で多様な〈想い〉につき動かされている。彼（女）らは、「ときどきアイヌ」になるといった流動的な自己意識をもって、アイヌであることと日本人であることのはざまで生きているのである。したがって、社会運動の場で前提とされる日本人／アイヌ民族＝抑圧者／被抑圧者といった平板な理解は、当事者たちの日常的な感覚においては、常に流動化され、再編を余儀なくされているのである。本研究は、このような日常生活の中の人間関係において流動的に捉えられているエスニシティのあり方を、日常的エスニシティという鍵概念によって捉えようとするものである。

図．二つのエスニシティ概念：日常的エスニシティと非日常的エスニシティ



日常的エスニシティ




## ３．研究の方法

（1）文化伝承活動が実践される日常生活の「場」に注目した参与観察を行う。すなわち、伝承活動が実践される「場」自体に着目し、そこが日常生活の場にもなっていることを明らかにし、その特質を実証的に検討する。また、そこで人々は、集団の境界を自分たちなりに意味づけなおし、差異を縮めるように再編することによって人と人とのつながりを築き上げている。このような、融通無碍な自己意識を形成し、エスニシティの境界すらも流動的に再編していく持続的な共同性が、どのような日常生活の場の特質によって生み出されるものであるのかを実証的に検討する。

（2）関係的主体によって語られる〈想い〉が形づくる共同性についてのライフストーリー調査を行う。持続する対面関係の中で、伝承活動を行う人びとが関係的主体として、アイヌ／和人といった区別をどのように用いているのか、それによってどのように自らの〈想い〉を語ろうとするのかという点に着目して、ライフストーリーの聞き取りを行う。人びとは自分なりの生活の文脈に応じてそれらの区別について語るため、アイヌであることをめぐるそれぞれの〈想い〉は、ズレを伴いながら分かち合われることになる。ここでは、固有の〈想い〉を伴うアイデンティティの語り方を明らかにするために、桜井厚らの提唱するライフストーリー研究法を採用する［桜井 2002］。それによって、語り手が人と人とのつながりの中に巻き込まれた関係的主体であることを想定し、時には定型的な語り口と対立・葛藤を生じさせることがあることも視野に入れることができる。ただし、これまでのライフストーリー研究がインタビューの場における語り手と聞き手との相互関係に注目しがちであるのに対して、本研究では伝承活動が深く埋め込まれた日常生活の場の文脈に注意をむける。

（3）日常的エスニシティの共同性原理についての考察と追跡調査を行う。揺れ動く境界をもった日常的エスニシティがどのような原理にもとづく共同性であるのかを考察する。特に、長期にわたって「場」を共にし、伝承活動を共に実践するという対面性の観点と、アイヌ文化やアイヌとしてのアイデンティティへの多様な〈想い〉を分かち合うという（ズレを伴う）類似性の観点から探究する。これは、参与観察によって捉えようとする伝承活動の「場」の特質と、ライフストーリー調査によって検討される人びとの〈想い〉を総合的に検討するものである。

## ４．研究成果

北海道の一地域にみられるアイヌ文化伝承活動において、同質的な共同体認識とは異なる重層化された共同性原理が存在することを検討してきた。その結果、〈アイヌ〉という共同性の認識のされ方は、「血」を共有することによる類似性に基づく関係性と、同じ「場」にいることによる隣接性にもとづく関係性との交錯によって構成されていた。「血」にもとづく関係性は、抽象的なカテゴリーへの帰属ではなく、具体的なつながりを辿ることに等しい。そこでは、個の代替不可能性が保持されているため、想像上の関係性の再編によって、つながりを作ったり、切り離したりすることが可能となる。つまり、「血」や身体的特徴はグループの境界を作るが、その境界はつねに再編されつづけている。なぜなら、そこには個の固有性が保持された関係性、つまり、馴染みの関係性が交錯しているからである。小地域に存在している対面的関係において、隣接性にもとづく地縁的関係性は、類似性にもとづく擬制的血縁関係と重ね合わされる。地域ないし小地域においてはアイヌと和人の間に多様な関係性が生じており、そのため、差別の経験の形態も多様なものとなる。エスニック・アイデンティティは、同じ「場」に居るという隣接的な関係性と深く結びついているのである。仲間同士による文化伝承活動は、日常生活に深く埋め込まれているため、アイヌ文化に対する多様なスタンスの存在を許容している。彼らは、アイヌとしての首尾一貫した立場を自覚しながら活動しているわけではないが、それにもかかわらず、代替不可能な固有性を帯びた、先祖たちの「想い」を大事にしている。彼らは、この仲間たちとの関係性を基礎として、差別に抗おうとする。彼らは、アイヌに対するネガティブな価値づけに抗うと同時に、人びとに「アイヌ」／「和人」という区別を強制するシステム自体に抗っているので

ある。類似性と隣接性の交錯する共同性の中に埋め込まれた個は、ブリコラージュの比喩を借りるならば［小田　2003: 220］、「周囲の他のモノや環境との相互関係のあらゆる可能性」に開かれた〈断片〉として存在している。それは、近代の啓蒙主義的な主体としての技師が用いる、「あらかじめ決められた計画（設計図）」という「全体に基づき一つの機能しか与えられていない」〈部品〉とは対照をなす。「…非決定的な自己が隣接性によって他者とつながることで一つの場、一つの非同一的で雑種的な空間を作りあげている…」。その空間において、「〈断片〉がその多様な関係性を失なうことなく〈断片〉のままちぐはぐにつなげられていく…」［小田　2003: 236-237］。

＜引用文献＞

岩渕功一 2010 『多文化社会の〈文化〉を問う――共生／コミュニティ／メディア』青弓社.
小田亮 2003 「『野生』の他者化を回避するために：ノスタルジアとアンビヴァレンス」スチュアート　ヘンリ編『「野生」の誕生：未開イメージの歴史』pp.218-240、世界思想社.
桜井厚 2002 『インタビューの社会学――ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
竹沢泰子 2009 「序　多文化共生の現状と課題」『文化人類学――特集 多文化共生と文化人類学』74（1）: 86-95.
戴エイカ 2003 「『多文化共生』とその可能性」『人権問題研究』３：41-52.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>関口由彦 | ４．巻<br>27号 |
| ２．論文標題<br>アイヌ民族と日常的エスニシティ：生活の場における民族的境界の再編をめぐって | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>燈を灯せ | ６．最初と最後の頁<br>1-6 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Yoshihiko Sekiguchi | ４．巻<br>4号 |
| ２．論文標題<br>What is the fluidity of identity? —Global movement and local life-world for Ainu people in Japan | ５．発行年<br>2017年 |
| ３．雑誌名<br>『グローカル研究』 | ６．最初と最後の頁<br>23-36 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>関口由彦 | ４．巻<br>82巻1号 |
| ２．論文標題<br>書評『アイヌの祭具　イナウ』 | ５．発行年<br>2017年 |
| ３．雑誌名<br>『文化人類学』 | ６．最初と最後の頁<br>101-104 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>関口由彦 |
| ２．発表標題<br>フィールドで差別について考えてきたこと① |
| ３．学会等名<br>成城大学民俗学研究所　差別研究会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>関口由彦 |
| ２．発表標題<br>アイヌの〈血〉が意味するもの |
| ３．学会等名<br>京都大学人文科学研究所共同研究会「人種神話を解体する」 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>関口由彦 |
| ２．発表標題<br>アイヌ文化を継承する人々：重層化する共同性原理をめぐって |
| ３．学会等名<br>慶応人類学研究会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2017年 |

〔図書〕　計1件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>関口由彦 | ４．発行年<br>2019年 |
| ２．出版社<br>寿郎社 | ５．総ページ数<br>208 |
| ３．書名<br>北海道大学もうひとつのキャンパスマップ | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|